

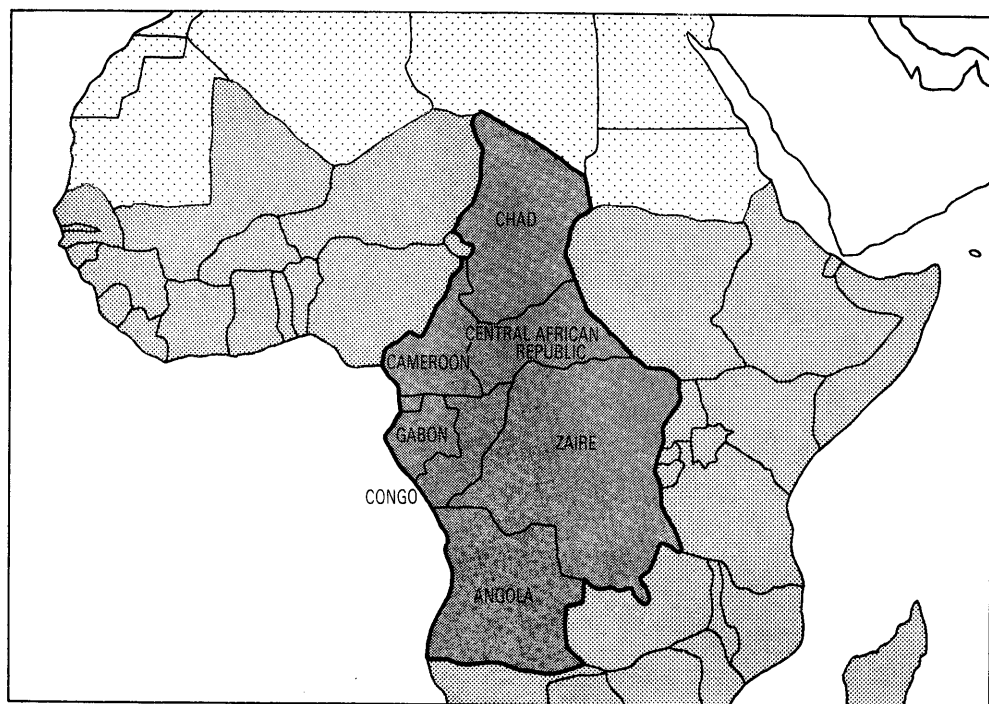
# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Veiled King's Bodies : Royal Authority (Regal Power) and Costumes of the Kuba

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡辺, 公三 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00003639">https://doi.org/10.15021/00003639</a>

## II 中部アフリカ



## 王の隠された身体

——クバにおける王権と衣装——

渡 辺 公 三\*

- |                |             |
|----------------|-------------|
| 1. はじめに        | 4. 衣装の作法と文法 |
| 2. 王の位置, 王への視線 | 5. 王の隠された身体 |
| 3. 産み出す王の身体    | 6. むすびにかえて  |

### 1. はじめに

「裸の王様」とよびならわされよく知られたアンデルセンの寓話、「皇帝の新しい着物」で王（皇帝）は、「美しい新しい着物がそれはそれはお好きで」「一日じゅう、一時間ごとに、お召しかえ」する。ところがある日、二人のいかさま師が「世にも不思議な性質を持っていて、だれでも自分の地位にふさわしくない者や、手におえないばかりには…見えない」なんと美しい服を織る機織り職人として現れ、王にかかえられる。服が「できあがり」それを身につけて行進する王が、じっさいには裸であることが「むじゃき」な子供によってはじめて声高く言明される。しかし「いまさら行列をやめるわけにはいかぬ」王は、「なおさらもったいぶってお歩きになりました<sup>1)</sup>」という筋だてはあらためて紹介するまでもないだろう。その寓話としてのおもしろさは、王の服が自分の地位にふさわしい者とそうでない者、愚かでない者と愚か者が見分けられ、区別される仕掛けであるといういかさま師のたくらみにひとびとが乗せられ、見た通りのことを言葉にするのを自ら禁じ、王自身もふくめ暗黙の共犯関係に入らざるをえないということ、しかもその共犯関係というルールそのものもけて言明されることなく、それによってありもしない服が「見られ」王はいっそう裸になってゆくという点にある。ありもしないものが「見える」状態を共同の幻想とよべるとすれば、この寓話は幻想の成立する条件、つまり独特のかたちの禁止を組みこむことで成立する共犯関係のありかたを指摘してみせたともいえよう。共犯関係のルールから

\* 国立音楽大学音楽学部

1) 訳文は、大畑末吉訳『アンデルセン童話集(一)』より引用。

降りることが、そのまま社会的地位と正常な判断力をもつことをみずから否認することになるために、だれもが心の中で密かにあることを禁じる。王自身さえもゲームから自由ではいられない。こうして王の行進がはじまる。この王の行進は社会の寓意と考えられる。いいかえれば「けして言明されぬ禁止によって維持される共犯関係」としての社会。だとすれば見えない服を見る「幻想」以前にもすでに「幻想」の成り立つ条件ははたらいっていたのであり、現にそこにある見える服を「王の服として見ている」ことそのものも幻想にほかならないではないか。王が裸であれ、服を着ているのであれ王権はある条件のもとで幻想にささえられていることにはかわりないのだ。それはだれもが目を見開いたままで見る幻想なのだ。これがこの寓話の教訓だといえるだろう。いずれにせよこのいかさま師たちは、裸の王を包むべき王の服という、まさにこのゲームのもっとも肝心なポイント、アルキメデスの支点ともいうべきところを衝いてはいたのだ。

ひとびとの多数の視線は地位や判断力を区別するシステムの中心としての王の服という一点に集中する。王の服は区別=差異化と、視線の統一というふたつのベクトルをどうじに実現する王権そのものの象徴であり、王権という幻想の体係をささえる物的な装置である。その不在は死すべき王の裸の身体とあっさり鋭く対比されざるをえない。つまりこの寓話は、死すべき生理的個体としての王と、王の身体を包みながらそれをこえた永続すべき王権を象徴する器（たとえば衣装）という、おそらくいかなる王権にもつきまとう問題にささやかな照明をあて、衣装という視覚装置と王権という幻想（観念）装置との関係<sup>2)</sup>という問をひかえめに指さして見せているともいえる。王の服を中心として張りめぐらされる地位の差異の体係は、その社会空間をどのように分節化するのだろうか。それは王をもたない社会の空間とどのように違ってくるのか。王の身体、王権、そして王をうみ王の存在によって視線の中心をあたえられ極性を帯びる社会空間、王権をささえる「装置」としての衣装などの関係という問題を、中央アフリカのクバ王国をてがかりにさぐってみたい。ただここで試みるのは、クバ王国で独自の発展をみせたラフィア繊維を使った衣装製作技法の紹介と分析ではなく、その布製品を素材として織りあげられる王権の体系の統辞法の素描というべきものである<sup>3)</sup>。

2) この問題を鋭く分析した古典的作品として [KANTOROWICZ 1957] がある。

3) ラフィア繊維による染織技術の分析については井関和代論文（本書）参照。またクバ王国の概観については、[TORDAY & JOYCE 1911; VANSINA 1964, 1978; 渡辺 1987] 参照。クバは中部アフリカのいわゆる「母系のベルト地帯」にはいり世代深度の浅い(5,6世代)母系のクラン (iloonci/maloonci) の観念がある。王位の継承も原則として年長の姉妹の年長の息子から順におこなわれ一世代全員が終わったところで次世代の姉妹の息子たちに移る。なお本文にてでくるブショング Bushoong というのは王族クランをふくむ、クバ王国の中心的民族集団である。

## 2. 王の位置，王への視線

クバ王国の王（王はニム Nym あるいはニミ Nymi とよばれる）のいる村ンシューングは、川辺でとれる大きな葉をラフィア椰子の軸の細長い棒で挟んで編み上げて作った高さ3メートルほどの塀に囲まれた王宮を中心に、大路ともいえる道を境に大きく二つの地区 (kombeemy, kombiengy) に分けられている。村そのものがほぼ東西の軸にそって作られ、王宮は西の奥に、大路への入口は東の端に位置する。入口の右（つまり南の側）と左（北）には戦士の長である Iyol と Shesh の家が置かれる。東／西の対比はむしろ上／下と訳せる tien/ngel という言葉で表される。それは a dik/a shin の対比で表される空間的な上／下とはべつに、方位、日の出と日没、川の上と下（クバ王国の中核となるブショング族の先祖は神話的な祖である Woot にひきいられて、カサイ川、サンクル川の北岸に沿って西方つまり下から移住してきたという。ザイル中央部ではこれらの川はほぼ東から西へ流れる）などを表し、さまざまな文脈でつかわれる。かつては日没後は、大路を横切って反対側の地区へ行くことは禁じられ、これに違反した場合は罰せられたという。逆に王自身は、日中王宮を出ることは例外的なできごとであり、いわばお忍びで人の家を訪ねるのは夜に限られていた。塀で囲まれた王宮（現在のものは巾100メートル、長さ150メートルほど）のかなりの部分は、王国の各地から集められた王の妻たちの住む後宮 (dweengy) であり、王およびそこに住む王の妻たち以外の者の出入りは固く禁じられている。高い塀や夜の闇は、王において隠されるべきものの存在を表している。王の存在そのものが隠された部分と、あらわに人目にさらされる部分との組み合わせによってできているともいえよう。

王が昼の光のもとで姿を現し、ひとびとの視線の中心の位置をしめる機会はいくつかある。「王の気の向いた時に」、王によって召集され王宮前の広場でおこなわれるダンスに王自身もくわわることがある<sup>4)</sup>。さらに王の位置がいわば王国の成り立ちの縮図として際立って示されるのが、国の重要事を議論するために、役職を持った重臣たち (bakolm と総称される) を集めておこなわれる会議 bual'l の場である。ここでは王を中心として、さまざまなカテゴリーの役職者の位置と席次および発言の順序といった作法がきめられている（図1参照）。この場の席次あるいは役職者の布置は、まさに王国の構成を目にみえるかたちに再現している。そこに何が読みとれるか見るこ

4) しかし先代の王 Mbopey a Mabiinci ma Kien はダンス嫌いで30年ほどの在位のあいだあまりダンスはさかんでなかったという。こうした慣習は王の個性によってかなり変化があるようだ。

とにしたい。ひとによって説明に細部の違いがあるとはいえ、以下の点はこの会議の特徴としてほぼ共通している。

20名ほどの重臣たちは、半円を描いて車座にすわりその中心の位置には、王と王のメッセンジャーである双子 *muyesh* の長<sup>5)</sup>、*Mato bushoong* (ブショングの耳) が相対してすわる。王の後ろには王の子供たち *baan ba Nym* および王の近従ともよべる *bashi shina Nym* (文字通りには、王の下の一ひとびと) がすわる。王と重臣のあいだにたつて双方の言葉を伝える役割をはたす双子たちをべつにすれば、対峙してすわる王、*baan ba Nym*, *bashi shina Nym* の一団と重臣たちの一団とのあいだに王権の構成にかかわる区分線が目に見えるかたちで引かれることがわかる。双子たちはこの境界上で二つのグループを仲介するのである。*Bashi shina Nym* (*bashi shina ntei* 木の下の一ひとびともよばれる) は広義の重臣ともみなされることもあるが、王と相対する他の(狭い意味での)重臣とは全く性格が違っている。

王に相対してすわる重臣たちを *bashi shina Nym* とはっきり区別するときには *binaan nuimi Nym* と総称する。これは直訳すれば王の男の母たちつまり王の母方

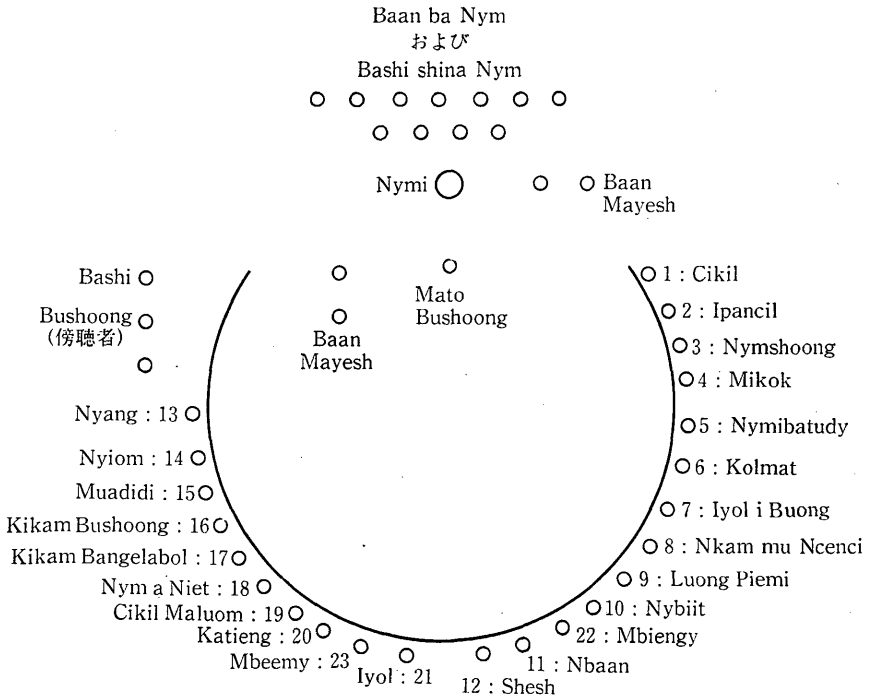


図1 Bual<sup>2</sup>における席次と発言順

5) 双子が王のもとに集められる例が、かつてコンゴ王国にもあったことは [RANDES 1961] にもふれられている。

のオジたちを意味する。bashi shina Nym と binaan nuimi Nym の違いをそれぞれのカテゴリーにふくまれる役職などから見てゆくことにしよう<sup>6)</sup>。

bashi shina Nym は 1) 後宮にかかわる者, 2) 王の食事にかかわる者, 3) 王の奴隷 (biet ba nym あるいは basho ba nym とよばれる) にかかわる者, 4) その他, の四つに大別される。

1) 後宮にかかわる者

Tataam: 後宮つまり王の多数の妻たちの監督, 取り締まり, 後宮へのひとびとの出入りを見張る。つねに当代の王によって任命された Tataam と, 前代の王の Tataam の 2 名が置かれている。

Pokibaan: Tataam と同じ役職だが, 位はさがる。かつては王の妻が病気を持っていないか, 王に先立って試す役割であったという。

2) 王の料理を作る者

Bupok: 王の料理長

Nshieg Mbuon: 王の料理係

Tiesh batua: 王の料理係, と同時に後出の Myshuosh の補佐をする。

Ngeli Mulaam: 王の料理作りの手伝い, 王の水汲みその他の雑用をする。

3) 王の奴隷 (王宮のうしろの奴隷の居住区 idiing に住む) を監督する者, ただし上の二つのグループより位は一段下がる。

Kieng't: idiing の長。王宮の警護にあたる。

Ncey Iyol: Kieng't を補佐する。

Nybiit idiing: idiing における Nybiit

Myshosh: batua を代表し, 王に要望を伝える役<sup>7)</sup>。

Nbebit: 王の衣装を運ぶ役。

4) その他, これは王が個人的に親密な友人 (bakidi nym) と認め, 王自身の称賛

6) 王権の意味を王とそれを取りまく廷臣のセット全体からみてゆくという視点は, ホカート [HOCART 1970] によって示されたものである。ここではこのセットの中心におかれた王の身体とその衣装に注意をむけてゆく。

7) batua というのは, クバ=プシヨング・グループがサンクル川をわたって現在地にはいつてくる以前から居住していた採集狩猟民で全体に小柄だともいうが, いまではクバとの混血が進んでいると思われる。いずれにせよこのグループは一般のクバ人からはやや低くみられている。とどうじに, 王とは特別に親密な関係をもち, 王の即位儀礼などには不可欠の役割を与えられている。batua のそうした位置を表すことわざとして次のものがある。Mbeyia ntua mwencia nshi bubaang, mbe nkidi yiek'di shwot.=batua の友人や bubaang の友人がいるのだったら, 別の友人をさがしたほうがよい。batua や bubaang (王にヤシ酒を献上する義務を負った一群の村の総称, batua とおなじく王に近くまた一般のプシヨングからは低く見られている) は, 友人にしたつもりでも, 結局われわれの秘密を王に通報する信用のできない連中だ, という意味である。

名 (nkuon) のひとつを与え、しかも王の近従することを認めた者であり、上記 1) 2) 3) のカテゴリーとは性格を異にする。常に王の側にいるわけではない。

1) 2) 3) の役職は王の身近に仕え、文字通り王の生理的身体そのものにかかわる点が共通している。すなわち、王の性生活にかかわる *dweengy* の女たちを監督する 1)、王の食生活をささえる 2)、王の衣生活その他にかかわる 3) である。王の生理的身体にかかわる活動は、王において「隠された部分」であり、これらの役職も摒で囲われた王宮内でおこなわれる。

4) の「王の友」をべつにして、これらの役職者は、出自の点でも王権そのものにむすびついた奴隷のカテゴリーに属するという共通性をもっている<sup>8)</sup>。ここで王の奴隷と訳す *nget a Nym/biet ba Nym* あるいは *nsho a Nym/basho ba Nym* はおもに王に近従する者として王族のクラン (*iloonci matoon*) にとりこまれそのメンバーとみなされた者およびその子供からなっている。のちにふれるように王族のクランは、王位継承権をもつグループと、王位継承権を放棄したグループとにわかれるが、さらに第三のグループとして王の隷属民があり *matoon manbil* とよばれ区別されている。*matoon manbil* の構成員は19世紀末までおこなわれた奴隷の交易で、おもに南の異族ルバから購入された者のほか、クバ王国内部からも供給された。村において常習的な盗人あるいは妖術者とされ近親からもてあまされたひとびとは、近親者によって王に提供され、もともとのクラン所属から除外され、王族クラン *matoon* の成員かつ王宮の奴隷とされたのである。*matoon manbil* の子として *basho ba Nym* の地位にある者には、*matoon manbil* であったのが父なのか母なのかよる違いが生じてくる。*Tataam*, *Bupok*, *Nybiit idiing*, *Nbebit* はいずれも、父が *basho ba Nym* だが母はいわば一般人であり、その意味で所属するクランの点では、完全に隷属民の位置にあるわけではない。

こうして王の真近に王とおなじく重臣たちに対面してすわるのは、王の身体にかかわる者である。かれらは広い意味での重臣として、何の位ももたない一般人とは区別されるものの、じっさいには王の隷属民としてむしろ低く見られる。一般人を「無徴」の存在といえんとすれば、王と隷属民（その一部は、盗人や妖術者なのだ）という社会的序列から見れば上下両極に「有徴化」された存在が、一団となって一般人 (*Bashi Bushoong* という表現がこれに相当する) の代表としての重臣層に対置されるということもできる<sup>9)</sup>。次に王の母方のオジともよばれる重臣たちの構成を見ることにす

8) とはいえコルネ [CORNET 1982] によれば *Nkidi Nym* も通常は奴隷身分の者に与えられるタイトルであり、かつては他の奴隷とともに王の埋葬時に王に殉死し、王の身体 (死体) とともに葬られるべき者だったという。



る<sup>10)</sup>。

Bual'lに席をもつ二十数名の重臣（これ以外にも多数の役職がある。別表1参照）は、それぞれ細分化された任務を分担している<sup>11)</sup>。そのタイトルひとつひとつについての詳細は、別表にゆずり、ここでは全体の特徴として注目される点をあげ、さらにいくつかのタイトルを例としてとりあげるにとどめよう。

重臣たち bakolm は、王の位置を軸に左右二つのグループにわかれて着座する。そのうちでも、王に対面するようにすわる6名は、王の村ンシェーングにおけるそれぞれの役職を反映する位置をしめる。つまり王から見て右（南側）には、Iyol, Mbeemy (kombeemy の長), Katieng (kombeemy の女たちの長), 左（北側）には Shesh, Mbiengy (kombiengy の長), Nbaan (kombiengy の女たちの長) である。これらの役職はそれぞれペアをなし、右の者が左の者よりも上位にあるとされている。

重臣は、図に示した番号に従って発言する。つまり王から見て左の手前から発言し（Mbiengy は例外）一通りおわたところで次に右側手前に移り、最後にンシェーングの住民を代表する Mbiengy と Mbemy が発言して終るのである。重臣が王によって選任される者として王をサポートし王権の中心部に参加していることは確かであるとしても、いっぽうでは逆に王国民を代表して王をコントロールする役割を期待されていることもまた確かである。このことは重臣層の構成にも反映している。すなわちかれらのうちのいくつかの役職は、王族クラン (iloonci matoon) 以外の「貴族」クランともよべる18の主要クラン (maloonci minbang't) のどれかと結びつけられ、かならずその成員から選任される。この18の主要クランはクバ王国形成伝承のなかで、

9) 制外者が王に帰属させられる（王族クラン matoon に編入される）ことについて、次のことわざ (nkuon) がよく表現している。

Nym amwa iiyal, kambel'k iket. = 王はごみ捨て場、何が捨てられても拒むことはできない。  
(iiyal = ごみ捨て場。kambel'k < abel = 拒むの否定形)

なお matoon mabil という総称の mabil は abil = 編入する、ステイタスを変えるという動詞からきている。

10) Binaan nuimi Nym 王の母方のオジという呼称でよぶ理由として、王は原則として王族クランの男のうち最年長世代の最年長者であり母方のオジをもつはずがないので Bakolm 重臣がその役割を果たすのだという。つまり重臣こそが現に王位にある者に優先して本来は王位につくべき位置にある、もしくは王に対する権威をもった位置にあるというわけである。

11) かつてはそれぞれの役職者が自分の任務にかかわる問題についての裁判権をもっていたという。Bual'l は最高審でありまた役職間での係争について審理したという (Bual'l は Ibaanci i bual'l = 王のもとの裁判として、Mabaanci mabol = 村の裁判と対比される)。植民地行政のもとで裁判権の集中が強制され、各役職者の裁判権は実質を失った。現在でも植民地時代のかたちをひきつぎ王の権威のもとで慣習法による最高審が Tribunal coutumier としてンシェーングでひらかれている。これは先代の王の息子 (Muanym) を裁判長として Ipancil, Gikil, Iyol, Kolmat などの役職者2, 3名がもちまわりで判事をつとめている。

Bual'l のイメージは先代の王の時代まで生きていた理念的なかたちであると考えておけばよいだろう。図1は、記憶に基いてインフォーマントが再構成したものである。

王権の設立に参加し王国の秩序の維持を条件として *iloonci matoon* に王の座を託すことを認めた、いわばクバ王国成員のアーケタイプとみなされているものだからである<sup>12)</sup>。

これら *binaan nuimi Nym* のいくつかを例として、その役割、王との関係などを見ることにしよう(番号は図と同)。ここでとりあげるのはその一部にすぎない(詳しくは別表1参照)

- 1) *Cikil*: この役職は必ず王と同じ *iloonci matoon* のメンバーが選ばれる。ただし *matoon* クランのうち王を出した分枝から遠くなり、王位継承権を放棄したグループの成員である。王は *bual'l* 召集の前夜、王宮内に *Cikil* を招き入れ話し合われる問題を説明し意見を求める。こうして *Cikil* を通じて王は *bakolm* の意向をあらかじめ勘案しておくわけである。
- 2) *Ipancil*: 会議の場で、ほかの者には言いにくいこともずばずばと言うのが役割。*minbang't* のひとつである *iloonci Ishoody* の者がこの役職につく。
- 5) *Nymibatudy*: 鍛冶師 (*batudy*) の長。選任されるための資格は、鍛冶仕事かうまいことという以外にはない。
- 8) *Nkamu mu Ncenci*: この名称は *akam* (制止する、おしとどめる) からくるという。*Ncenci* は雷。雷はすなわち王のことをさす。この役職は本来二人で、*bual'l* のおこなわれる時、広場 (*ibaabci*) に王が現れるのを王宮出口で待ちうけ、左右につき数歩進んでは、右手をあげ、マ、マ、マ、と言いながら王を制し自分は何歩か進み、再び王も進んだところでまた制するというを何度かくりかえす。雷にたとえられる威力に満ちた王がひとびとの前に現れるという危険で異例のできごとをアピールする役職ともいえよう。
- 15) *Muadidi*: この役職につくのは、生存する王の息子で最年長のものである(したがって普通は、先先代あるいは先代の王の息子となる)。王の息子 (*baan ba Nym*) のあいだで係争が生じた時に調停と解決にあたる。また王権の歴史にかかわる口頭伝承を保持するのもその役目である。
- 16) *Kikam bushoong*: *bakolm* が王に対して批判あるいは注文をつけたいという

12) とりわけ後出の *Kikam bushoong* のような役職にそれが表れている。またここではとりあげないがもうひとつ重要な王権のチェック機関として *Kikam banguom* という役職者を長として18の *Minbang't* クランから選ばれたメンバー (*Banguom* とよばれる) だけからなる *Nguom Nciam* という会議がある。*Kikam banguom* は王の死後の空位期間、王権を護持する者であり、また新しい王は *Ibaam* とよばれる *Nguom Nciam* の秘密会で *Banguom* の承認をうけなければならない。*Kikam banguom* は死んだ前王の子であるのがふつうでそのためいっそう新王へのチェックは厳しくなる。*Banguom* も役職者ではあるが *Bual'l* に参加する *Bakolm* をかねることではなく、王の主催する会議には参加しない。*Minbang't* クランのリストは渡辺, 1987参照。

意見の一致を見た時、この役職者のイニシアティブのもとで *ishaam'l* とよばれる特別の非公開の会議がおこなわれる。ここでは *Muyesh* (双子) による仲介もおこなわれず *Kikam bushoong* を筆頭に、王への直言がなされる。この役職は(先代の)王の息子でしかも、*minbang't* クランに属する者でなければならない。

18) *Nym a niet*: 文字通りには「水牛」の主の意味。王国内で水牛が仕留められたとき、その肉および角をこの重臣を通じて王にさしださなければならない。王の息子が任命される。

王は、こうした重臣たちの視線の焦点にあってかれらと対面する。王の背後には、文字通り王の身体を維持する近臣がひかえる。この二群のひとつの拮抗する空間として、クバ王権が成立している。重臣グループは *Mbeemy* と *Mbiengy* の対比に象徴される「右左」の区分 (*Mbeemy* の側の重臣 *bakolm ilombeemy* と *Mbiengy* の側の重臣 *bakolm ikombiengy*) に加えて村の「上」の有位者(有位者は鳥の羽をさす *shal* という語で表される。後出。)とよばれる *Iyol*, *Shesh*, *Kolmat*, *Nkam mu ncenci*, *Nybiit* と、それ以外の重臣という区分によっても分節されている。二群の重臣を区分する線と、左右を区分する線、ほぼその交点にあって視線を集める王の身体。王権の基本的な構成をそのようにいうことができるだろう。ただその細部にはより微細なさまざまなバランス装置が組み込まれていて、中心としての王の存在によって極性をもった社会空間が成り立つとどうじに、その部分部分に限定された力の微均衡をつくりだしているともいえる。

### 3. 産み出す王の身体

力の均衡には、視線の焦点にあって可視的な身体でなく、もうひとつの隠された王の身体が大きな意味をもってくる。「生殖し、子をうむ」ものとしての王の身体の側面である。

王の「産出力」ともいうべきものがクバ王国の観念世界でもたいへん大きな意味をもった形象であることは、人目から隠されることでいっそう目立たずにはいない、後宮 (*dweengy*) の存在からもうかがえる。王への女性の集中という事態を、王権の構成の基本にかかわる、王権の一般論につながるレベルで考えるための枠組みは、まだ十分には検討されていないのではないか。そこには多産と豊饒の象徴としての「神聖王」といった象徴人類学の視点からだけではあきらかにしえない問題が含まれているように思われる。

たとえば、多くの女を集中する王の「婚姻」は、一般の者の「婚姻」とどのように対比されるのか。王に与えられた女は、どのような関係の媒介者となるのか。つまり王の「婚姻」はその社会でどのような形象としての意味をもっているのか。

あるいは、王のもとに多くの女が集中されることによって、その社会全体の人的再生産の構造というべきものにどのようなバイアスがかかるのか、あるいはかからないのか。王にはとびぬけて多くの子女ができることが期待されるが、かれらはその社会でどのような分節線を描き出してゆくのか<sup>13)</sup>。

ここでは王の子弟と地位との関係から、王権の構成と「産み出す王の身体」とのかわりのいくつかの側面をみることにしよう。

重臣のいくつかの地位は、王の親族（王の子、孫）から選ばれた者にあたえられる（上記の15）、16）、18)）。こうして *bashi shina Nym* と *binaam nuimi Nym*、王族クランと主要クランおよびその他のクランなどの対比、そのさまざまな分節と交叉してさらに王の子女とそれ以外の者の対比、王の子女内部での現王と先代あるいは先先代の王の子女の対比、王の「本当の」子（王の大きな子 *Muan Nym munen* とよばれる。*Muan Nym munen* の子は、王の「本当の」孫 *Nkaan Nym munen* とよばれる）と「本当でない」子（たんに王の子 *Muan Nym* とよばれる。その子は、ただの王の孫 *Nkaan Nym*）の対比が生じてくる。王の傍らには、王の近臣 *bashi shina Nym* にくわえて王の子 *baan ba Nym* がひかえる。とりわけ王がまだ若く、しかも重臣層の世代交替が進んでいない場合には、王の傍らのまだ若い現王の子と、重臣である先代もしくは先先代の王の子とが、会議 *bual'l* の場で対峙するのである。

王と主要クランとの力関係の変化としてクバ王権の歴史を見ると、重臣の役職をふやしそれを王の子女に配分することが、王にとって主要クランの発言権をおさえこみ王の権威をます大きな手段であったといわれる<sup>14)</sup>。じっさい、ときには王は恣意的に重臣のタイトルをふやし、主要クランの相対的勢力をそごうとした、そのために重臣のタイトルは常にインフレ傾向にあり、名目のみのものも多く、また空位になったまま忘れられてゆくものさえある。とはいえ母系によって王位が継承されるクバ王国では、期待される王の権威の増大という効果はさほどすなりと実現されるわけでもない。なぜなら王の代がかわれば王の子である重臣は、むしろ先代の王の精神的継承者として新しい王の権威をチェックする役割を演じることになるからである<sup>15)</sup>。

タイトルの増減と消長という歴史的な背景はさておき、現在知られる重臣のうちで

13) このような問題については別に考える予定である。その一部は [渡辺 1989b] 参照。

14) とりわけ [VANSINA 1978: 136] 参照。

15) そのようなはたらきを集中して体現するのが *Kikam banguom* である。脚注12) を参照。

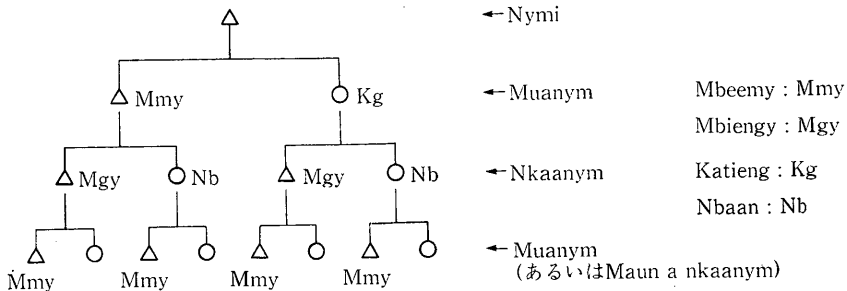


図2 王の村を代表するタイトルに選ばれる資格のある者

王の子あるいは孫のみが選任されるとされるタイトルは確かに少なくない。たとえば **Mbeemy**, **Mbiengy**, **Katieng**, **Nbaan** という王の村を代表する男女のタイトルは上図のように、王の子および孫からだけ選任される。ここで **Muanyym** とよばれるのは、王を父 (**Taat**) とよぶことのできる者であり、互隔世代の王 (**Nymi**) と王の孫 (**Nkaanyym**) の同一視によって **Nkaanyym** の子までをふくんでいる。役職をあたえられる資格としての王からの血縁がたどられるのは、この三代めまでであると考えられる。王の娘については孫の代までとなっている。

これら以外のタイトルで、王の子あるいは孫であるという条件があるものについては表を参照されたい。

ところで王の後裔というステイタスは、ほんらい人目からは隔離された「産み出す者」としての王にかかわるのであり、そこには虚構がはいりこむ余地がある。だれでもが知っているながら、言明されないことで維持される共犯関係がこのステイタスを保っているということもできよう。それは王の子内部での **Muanyym munen** (王の本当の子) と **Muanyym** との区別である。王は後宮に多くの妻を囲い込んでいる。その数は先代の王 **Nbopey Mabinci Manbeky** では500人 (うち先代王からうけつがれた妻約300) という。こうした王の法外な数の妻、王の通常を超えた「婚姻」の形象をもつ意味をさぐる試みは別の機会にゆずり、ここではこの二種の王の子の区別に簡単にふれておきたい。

数多くの王の妻のうち、半数近くは先代の王からうけつがれ、したがってその多くは通常すでに出産力をうしなった女性であるという。しかしかつては新しい王は、あらためて原則として王国の各クランから若い女性を1名ずつさしだされた<sup>16)</sup>。そのうち王が本当に性的半侶とするものは、ごく限られた数にすぎない。王の寵愛をうけ

16) 歴史的にはまず **Minbang't** の18のクランが女を献上したという。[VANSINA 1978: 54] を参照。王のもとへの女性の「集中」については [渡辺 1989b] 参照。

られない女性は、王宮外から男をみちびきいれ満されぬ思いを何とか癒そうという。そこでは王を裏切った者という汚名だけでなくさらには死が賭けられる。この王の妻の姦通が発覚したときには男女ともに秘密裡に処分される（それはだれもが知っているいわゆる公然の秘密ではある）。しかしそうして生まれた子は、王の子として育てられるのである。その子が本当は王以外のどの男の子供であるのか、知らない者はいない。だがそれを口にだして言明する者はいない。Muanyim munen と区別された、ただの Muanyim の「本当の」父を名ざすことは、本人だけでなく王に対する侮辱ともなるからである<sup>17)</sup>。さらにいえば、王権をささえる重要な役職をになう数多くの「王の子たち」がじつは王の権威とは無関係な、ただの人 (muot bukal 文字通り、何でもなしの男の意) の子供であると言明することは、王権をなりたせている複合的なバランス装置の支点にあるフィクションをフィクションとして名指し、そうすることで王権社会というゲームを終わらせてしまうことにほかならないのである。

#### 4. 衣装の作法と文法

中心にいる王に視線を集める重臣たちと、王の身体をささえながらかれらに対面する近臣たち、隠された王の性的身体から生まれる王の子と先王の子たち、王の義理の父の地位にありながら王の母方のオジとよばれる重臣たち、社会の頂点と底点の両方をふくんで一般人に対比される王族クラン、こうしたさまざまな対称性をもった関係が、王の存在の周囲で交叉しあうことによってクバの王権がなりたっている。こうした極性をおびた関係の網の目のなかで、「地位」をもち「判断力」をそなえたクバ人は自分を位置づけている。逆にこうした関係の網の目によって自己のアイデンティフィケーションをおこなうというゲームに人を取りこむことが、クバ王権ひいては国家というものの成立そのものにほかならない。なぜならそこで人ははじめて、王の身体という基準点との距離によって自分の「地位」を見定め、言うてはならぬことを区別する「判断力」をもつことつまり社会的主体であることを強いらられるのだから。

この自己同定のゲームのもっとも強力な物的装置が、クバ王国における衣装である。衣装はまず何よりも区別のための装置としてあり、クバ社会における区別の主要な二つの分節線である、王の周囲に配置されたさまざまな役職のカテゴリーの区別と、王との親族関係による区別にかかわってくる。これら二種の社会的カテゴリーの区別

17) munen という語は「大きい」の意。これを「本当の」と訳すのは意識である。「最愛の」とでもいうのが適当かもしれない。いずれにせよ「本当の父」をすなわち「生物学的な父」（いわゆるジェネター）に重ねて考えすぎないほうがよいだろう。

の系列と、目に見える衣装の構成要素とをむすびつけることによって衣装の体系がなりたつ。示差的な衣装の構成要素はいちおう二つの面にわけることができる。すなわち、使用される自然の素材の系列と、ラフィア製の布の加工法をふくむ技術の系列とである。

示差的記号の素材としてめだって活用されるものに、冠りものに使われるさまざまな種の鳥の羽がある。またかつて貨幣として流通していた宝貝を使えるか使えないか、一定の獣皮を使えるかどうかなどが定められる。技術の系列として、帯や裳布を飾る刺繍の技法および図案のモチーフなどがある。こうした細部にたちいる前にまず、衣装の目を惹く部分がどのように構成されているかを見ておくことにしよう。ここでとりあげるのは社会的自己同定が何よりも問題となる男の正装の衣装である。それは身体の上から下へとほぼ次のようなパーツからなっている。

1) 頭部 (頭: ncuey)

冠りもの: laket と総称される。ラフィアの繊維を編んで作るものがもっとも一般的で日常にも用いられる。円錐状あるいは円筒状の編んだものを台地として鳥の羽で飾り役職を表すことが多い。獣皮製の冠りものもある。

鉢巻き: nbup mu bosh

2) 胸部 (胸: latol)

胸(首)飾り: buoy bu paang 白い山羊の毛を用いたもの、豹の歯を用いたものなど。

3) 腰部 (腰: lakoon, 尻: ishok)

巾の広い帯: iyeemy

裳布: mapel 衣装の本体というべき布。

前垂れ: mbuemy 獣皮装で裏にポケットがある。

尻当て: iyet

4) 足 (lakol)

足輪: shaang

1) ~4) の各部分からなるセットを衣装における「統辞」(サンタグム)の連鎖とよべるなら、各部分ごとに用意された、さまざまな素材と技法によって作りだされるヴァリエーションを衣装の「連辞」(パラディグム)とよぶことができる。クバの伝統によって用意された連辞のそれぞれの品目について、使用および組み合わせの禁止、指定、許容などのルールがありこれをクバにおける「衣装の文法」とよべるだろう。この文法にしたがって着用された衣装のセットを比喩的に「衣装のエノンセ(言表)」

ということもできる。この言表によって意味されるものこそクバの王権によって分節化された社会空間とそこに生きるそれぞれの主体にほかならない<sup>18)</sup>。

さきあげた二つの主要な社会的分節線のうち、役職のタイトル(shal)の表示はとりわけ頭部に集中し、鳥の羽(shal) (用いられるのは尾羽であることが多い)によってマークされる。鳥の種とその用法のあらまはは次の通りである(下線はクバ語の呼称、学名は [SERLE and MOREL 1979] に拠ってクバ人とともに比定したが確定してはいない)。

- 1) サイチョウ (Ngat: Calao à joues grises: *Bycanistes subcylindricus*): 双子 (Myvesh), 王の奴隷のうち Myshosh がこれをつける。
- 2) フクロウ (Ishuk': Hulotte Africaine: *Ciccaba woodfordi*): 特にことわらない限り bashi shina Nym および binaan nuimi Nym の大部分のタイトルがこれで表示される。
- 3) ホロホロチョウ (Kaang': Pintade commune: *Numida meleagris*): Mbeemy および Mbiengy がその冠りものにつける。
- 4) ワシあるいはハヤブサ? (サバンナに棲む Nkidi bushepy と森に棲む Nkidi mu Puong がある: *Circaete brun*: *Circaetus cinereus*?): bashi shina Nym のうち, Pokibaan および Nshieg Mbuon, binaan nuimi Nym のうち Ipaancil Nymishoong, Nyang (それぞれ図1の2, 3, 13) がつける。なおこれら三つのタイトルは, ikash とよばれる獣皮製の冠りもの(獣の種は問わない。10×30 cm ほどの扁平な皮を後頭部から頭頂へと乗せて側頭部にあたる紐で掛けとめる) がかれらだけに許されるということによっても他の役職者から区別されている。
- 5) オウム(ヨウム) (Kosh: Jacko: *Psittacus erithacus*): オウムの尾羽は王と同じクランである Cikil だけが冠りものにつける。しかし, しばしば王と重臣たちは, 軽々しく口をひらかない, 「口外してはならないことをしゃべらない」ことのしるしとしてオウムの朱色の尾羽を唇にくわえる。ひとまねをしてよくしゃべるオウム pul atuot (よくしゃべる鳥とよばれる) が寡黙であることのしるしになるのは少し奇妙だが, クバのひとびとはオウムが「話す」のを頭の下さの表れとしている(オウムは pul buany 利口な鳥ともよばれる)。
- 6) ワシ (Puong: *Circaete Jean-Le-Blanc*: *Circaetus gallius*?): ワシは鳥の王とみ

18) 社会的分節と衣装のかかわりについては, 古典的なボガトイリョフの論文 [1981] がある。また日本の古代王朝における衣装の制度について, たいへん刺激的な武田氏の著作 [1984] がある。アフリカの王権における衣装については [川田 1976, 1979, 1981] が参考となる。



なされまず王のしるしとなる。王以外のタイトルでワシの羽が指定されるのは、戦士の長として王の村ンシェーングで入口を守り、王宮とは対極の位置にいるともいわれる Iyol と Shesh (図1の21, 12) (Iyol の補佐である Ncey Iyol もおなじ)、そして王に対して王国の住民を代表する立場にも立ちうる Kikam Bushoong (図1の16) これら三者である。Iyol と Shesh は先が三叉あるいは四叉にわかれ管状になった鉄製簪にワシの尾羽根を刺して (mingaancy mi puong とよぶ) 冠りものに通し、Kikam Bushoong は天辺にワシの羽の束 (ibeky puong) をつけた冠りもの (Kokok matuong とよばれる) をかぶるといように両者の用法は異なっている。つまりおなじ素材が技術の違いによって二種の連辞に分化しているともいえる。また王によって認知された地方首長もワシの羽をつける。

ワシの羽を使った冠りもののひとつに Mput mu puong とよばれるものがある。これはラフィア繊維で半球状に編んだ台地にワシの羽と他の鳥の羽をまぜて植えたもので、文字通りにせの (mput=うそ) ワシの冠りものとしてだれがつけてもよい。本来王および王に比せられる者以外には許されないワシの羽の使用を「遊び」として許容するというわけである。こうして本来許されない破格を「遊び」としていぬけるための衣装の作法はさまざまに工夫されている。

1)～6)の鳥以外にも装飾のために使われる種はいくつかある。タイトルの区別とはむすびつかない種として次の三つをあげておこう。

- 7) テンニンチョウ? (matambienci あるいは buobuo: *Veuve Dominicaine: Vidua macroura?*) 雄の長い尾に白と黒がありこれを装飾に使う。
- 8) コサギ (Nyeny: *Aigrette Garzette: Egretta garzetta*): ステイタスを問わず使われる Kuona nyeny という冠りものを作るのに用いられる。
- 9) ヨタカ? (ibolbol: *Engoulevent à longue queue: Caprimulgus climacurus?*): 乾期には尾が長いのでこれを羽飾りとして用いる。

冠りものに色とりどりの羽を開いた房のように植えこんで飾り会議に集まる重臣たちは、さながら鳥たちの会議のようでもある。タイトルをマークする種のあいだには、Puong>Kosh>Nkidi>Kaang'l>Ishuk'l>Ngat という序列 (Ngol muang) がいくぶんか意識されている。ただそれはもう少し正確に言えば二つずつを対にして、Puong≧Kosh>Nkidi≧Kaang'l>Ishuk'l≧Ngat という関係だとする説明もある。いずれにせよ shal (羽=タイトル) をもつ者はもたないとはっきりと対比される。社

会的地位を冠りものによって表示することは、クバ王国にかぎらず周辺の首長制社会（サンクル川の対岸に住むデンゲセ族，より西方のクバの故地に近いとも思われるモンゴ系のグループ，さらにはペンデ族，コンゴ諸族など）でも共通である。とはいえそのために鳥の羽を体系的に利用することはアフリカ中央部のバンツー系諸社会ではほかに例を聞かない。クバにおける鳥の羽が，地位の識別以上の，王権のコスモロジーにもかかわる象徴的意味をもつものかどうか知ることはいずれの課題ではある<sup>19)</sup>。

鳥の羽以外の冠りもののパーツをふくめ，他の衣装の構成要素はとりわけ王との親族関係によって使用のルールが定められるといえる。王との関係を表す名称は以下の通りである。

- 1) Nymi: 王本人
- 2) Inemy (Inaan a Nym の略): 王の母，この単数形の場合には王の実母をさす。
- 3) Binemy (Binaan ba Nym の略): 王の母たち，複数形で王族クラン (iloonci matoon) の王の実母と同世代の女性をさす。
- 4) Paanganym/Paanganym 王の姉妹。
- 5) Ishaanym (Ishaan a Nym の略)/Bishaan ba nym: 王の父。王の実父（ただし王の実父は「まず例外なく」王の即位のときにはすでに死亡しているという）および王の母たちの夫たち。
- 6) Ncey nym/Ncey nym: 王の妻の兄弟。
- 7) Buemy: 王の第一後継者（親族関係のうえでは，原則的に王の同母弟あるいは王の母方のオイである。）
- 8) Muanyim munen/Baan ba nym banen: すでにふれた王の「本当の」子。
- 9) Muanyim/Baan ba nym: 王の子。
- 9') Muan a nkaanym: 王の孫の子。これは Muanyim ともよばれる。
- 10) Nkaanym munen/Bakaan ba nym banen: 王の「本当の」子の子。
- 11) Nkaanym/Bakaan ba nym: 王の孫。
- 12) Mwam'sh yook piem: 王の第一夫人。
- 13) Mwam'sh munen/Baam'sh banen: 王の第一夫人以外の「本当の」妻。
- 14) Nkidi Nym/Bakidi ba Nym: 王の友人。
- 15) Nkidi a Inemy/Bakidi binemy: 王の実母の友人。

19) 民族技術と衣装，王権と衣装のシンボリズムといった問題提起はあまりされてこなかったそうである（[FEELEY-HARNIK 1985]の指摘。またそこでとりあげられた [KUPER 1973a, 1973b]を参照）。

16) **Kum a puong**: (これは王の親族ではないが) クバ王国内で王に臣従するブショング以外のエスニック・グループの首長 (Kum は首長の総称)。ワシの羽 (shal a puong) をつけることを許されている。

17) **Inaan a kum**: Kum a puong の母。

このようなカテゴリーごとに、どのような衣装の部分が指定され組み合わせられるかについては別表2にゆずり、ここでは注目すべき点をいくつかあげておこう。

まず、素材についてはももとはポルトガル商人によって中央アフリカにももたらされたらしい寶貝 (paash/paash), ビーズ玉 (diish/miish) (白, 黒, 赤, 青, 黄などがあるがとりわけ白と黒とのコントラストが好まれる) の使用が一定のひとびとに限られ, とりわけ王の衣装ではそれがふんだんにもちいられること。piemi とよばれるおそらく海産の巻貝も使用できる者が限られる。交易によって外からはいつてきたものが貴重品として限られた人だけに許される例としてはブランケットの生地 (とりわけ赤いもの) が裳布の素材として高く評価されるということもある。素材として獣皮が用いられる部分については, ヒョウの皮, ngon'l (キリンに似た獣というが何かは不明) の皮の使用が限られる。とりわけヒョウの皮は王のみに用いられる。ヒョウの歯で作られた首飾りも使用できる人は強く制限されている。

技術およびモチーフについては特殊な形の冠りものを使うこと, 寶貝とビーズを並べて作る一定のパターンを使うこと, とりわけ二つの楕円を交差させた形もしくは一筆書きの組み紐文の imbol/mambol とよばれるモチーフを一本の帯に五つ使うことの制限などが目立つ。男女の裳布はラフィア繊維製品としてももっとも完成されたクバの工芸品であり簡略にあつかうことはできないが, 二つの点だけにふれておこう。裳布においてひとびとの注意はとりわけ上下の縁の部分と中央の広い面の部分とに惹きつけられる。縁の部分については, 例えば正方形を三段ないし四段ならべた市松文様は, 王とその近親だけに許される。一般の者は長方形をならべた市松文様でなければならないのである (しかし, しばしば限り無く正方形に近い市松文様を作りながら王からの非難をかわそうと工夫する者がいるという。すでにふれた mput mu puong と通じる話である。)。中央の面に幾何学的なモチーフを描く技法として, 一部分糸を抜いて透かしの文様にする技術があるが, これも王とその近親のみに許される<sup>20)</sup>。

最後にもうひとつ注目すべき点として, 生きているあいだは使用が禁じられている衣装あるいは冠りものが, 埋葬に際して許されるということがある。ひとびとは死後

20) 男女の衣装はクバの染織技術の産物としてもっとも興味深いものだが, ここでは詳細には立ち入らない。別に論じるべきだろう。

埋葬に先立って一定の日数のあいた盛装をつけられ小屋掛けの下に安置され弔問をうける。その盛装がいわば格上げされるわけである。このことはクバにおける衣装のもうひとつのきわめておおきな意味にかかわってくる。すなわち社会的アイデンティティの表示がもっとも完成された死装束ともなるという点である<sup>21)</sup>。

## 5. 王の隠された身体

一定の素材、一定の技法がもっぱら王および王に近い者に制限されることで、クバの衣装体系のなかでとりわけ強くしづけられた一群の衣装ができあがる。そのなかでも王の衣装が頂点を作り、他の衣装はいくつかの要素がマイナスされ禁じられたものとしてグレードづけられてゆくともいえよう。そのもっとも下の位置に、ひとびとが日常身につけるカムウッドで赤く染めただけで何の装飾もない裳布（男のものは *mapel bukal*=ただの *mapel*, 女の場合は *mpap'l bukal*=ただの *mpap'l*）がある。技法の視点からはむしろ逆にいうのがより正確であろう。すなわち、もともと何のしるしも帯びていないプレーンな衣装に、外から取り入れられあるいはクバ国内で工夫され開発されたさまざまな技法と素材が次々に付加されることで、有徴化された衣装が押しあげられより高くグレードづけられていった。そのグレードはそのつど王を中心としたクバ王権体系におけるグレードと関係づけられていった。その意味でクバ王権の形成史の基底にラフィア繊維染織の技術史があるといってもおそろしいすぎではないだろう。ラフィア繊維の織りの技術の導入そのものが、クバ王権の「中興の祖」ともよべそうな *Shaam a Mbul a Ngoong* 王の功績とされていること自体、その伝承が歴史的事実であるかどうかということ以上に、クバのひとびとにとっての王権とラフィア染織技術の本質的なつながりの意識的（あるいは無意識の）表明となっているといえよう。歴代の何人かの王が、国外の旅のときに新しい装飾デザインを学んで持ち帰ったという伝承もこの *Shaam* 王のモチーフをひとまわり小さくして反復するものとも考えられる。新しい素材、新しい技、新しいデザインでさらに飾られることで

21) したがって死に際して立派な衣装がないことは、一生の恥と観念される。いわゆる妖術者 (*bulok*) の嫌疑をかけられ毒による試罪法によって有罪とされた者（これは植民地化以前に行われた。現在では占い師による）の親族は、妖術の被害者に対して何着かの衣装を賠償としてあたえなければならなかった。こうして葬られる時の立派な衣装を失うことそのものが「恥」による制裁の意味もちえたと説明される。ダンスの時に歌われる歌にも立派な衣装をもたない者を、名をふせて遠回しにあてこするものなどがある。一定の年に達した老人たちにとって自分の死を飾る衣装一式を整えることが、人生後半期の最大の課題でありまた生きがいでもあったとみうけられる。それについては [渡辺 1985] にも僅かだがふれた。現在の青年層はそうした価値観を共有してはいない。

王はいっそうひとびとの視線をひきつけ、より華美な幻想の体現者としてひとびとに君臨していった。しかしその衣装はたんにより多くの技法、より希少な素材を用いたものであるだけでは王の衣装であるのに足りない<sup>22)</sup>。王の衣装は、量的で連続的なグレードにおいてもっとも高い位置をしめるだけでなくそれ以上に、唯一者としての王の存在をしるしづける他から隔絶した、不連続な飛躍を含んだものでなければならぬだろう。

そうした王の衣装の頂点に位置するものがある。bwaancy とよばれる一セットとなった衣装である。これは数多いさまざまな王の衣装のなかでもきわめて特徴的なアンサンブルとなっている<sup>23)</sup>。他のセットが個々の構成部分からみれば、華美の程度の点で違いがあるとはいえ王の近親者によっても共有されるものであるのに対し、bwaancy はまったく王のみに限定されている。あらたに即位した王は、遅かれ早かれ王付きの衣装作りの長 Nybien に、自分自身の新しい bwaancy を一セット作ることを命じ、完成したアンサンブルには固有の名が与えられる。こうした bwaancy のユニークさは、これがひとの（地位の差異を表す）衣装体系というよりも、むしろひとを超えた霊 (Ngesh とよばれる水あるいは大地の霊) のダンスの衣装デザインにインスピレーションを得たものであるということにあると思われる。そのことがまた、この衣装と他の衣装の強く目を引く不連続性を証明する。すなわち王のものをふくめ他の衣装ではひとの注意をひくポイントはおもに頭部の冠りものと、腰部の裳布であり胸や腕や下肢は覆われないのに対し、bwaancy は顔を除いて（顔もこめかみから顎にかけて宝貝の装飾で覆われる）ほぼ全身がすっかり隠されてしまうのである。

bwaancy はおもに次のようなパーツからなっている。

- 1) ncuum a nym: bwaancy で用いられる家の形の冠りもの。
- 2) mbup mu ndel: bwaancy で用いられる鉢巻き。
- 3) latok la bwaancy: 上半身を覆うチョッキ状の上着 (latok は身体の意)。
- 4) mikol mi bwaancy: 腰から足首までを覆うズボン状のもの。二本に分かれている。
- 5) mapel: mikol のうゑに巻かれる裳布。
- 6) makash maneemy: bwaancy で用いられる手袋。
- 7) mateemy maneemy: bwaancy で用いられる足袋。6) と同じく爪は象牙製。

22) ただし新しい技法と素材の集中と洗練の場として後宮の女たちがきわめて大きな役割を果たしたであろうことは想像される。

23) 以下の王の衣装 bwaancy については [CORNET 1982] の p244 以下, p311 以下の記述がたいへん参考になった。

これらにさらに金属製の腕輪や足輪などのアクセサリーがつく。全体は優に90キロ近くの重さになり、この衣装をつけたときには王は両側から支えられてようやく移動ができるのだという。これらのパーツのうち他の衣装にはなく *bwaancy* のとりわけ大きな特徴をなしている3), 4), 6), 7) は *Ngesh* のダンスのマスク付きの衣装 *Mo-oshanbooy* と製作技法上は同一であり、王のほぼ全身を覆うのである。

じっさいには、王がこの衣装をつけてひとびとのまえに登場する機会はごくまれであるという。たとえば1939年からほぼ30年にわたって在位した前王 *Mbopey a Ma-biinci ma Kien* はその長いあいだに *bwaancy* をわずか三回しか身につけなかった。しかしどの王もこの衣装を必ず身につけることが少なくとも一度はある一たとえそれが死後であるとはいえ。すなわち王のもっとも王らしい衣装 *bwaancy* は、王が埋葬するさいに身につける衣装なのである。

埋葬に先立って王の死体は9日間安置されひとびとの弔問をうけ、また一方で埋葬の準備、空位期間の王の代行者の決定（ふつうは王が生前自分の息子の一人を指名しておき、さらに数人がそれを補佐する）がすすめられる。前王の葬儀の描写から要点をひろえば以下のような点が注目される<sup>24)</sup>。

9日間の安置のあいだ王の衣装は3度かえられる。第一の衣装は、比較的簡素な *labot latuol*、第二の衣装は *labot lanshesh* でいずれも、宝貝が大量に使われているとはいえ形式上は、王の子など他の王族にも共通して用いられうる裳布が中心となったアンサンブルである。最後の第三の衣装が *bwaancy* であり、どうじに頭部は *Ngesh* を表すダンスの衣装 *Moshanbooy* のかしらの顔面の部分だけをのぞいた *belepey* とよばれる冠りもので覆い隠される。こうして王の死体は *bwaancy* によって覆われ、多くの副葬品とともに棺におさめられて埋葬される。つまり王の死んだ身体はすっかり包まれ、*Ngesh* の霊として聖別され埋葬されるのである。

それぞれの王の *bwaancy* はこうして王が *Ngesh* にいわば格上げされて葬られるための具体的な装置となっている。それだけではなく、王の第三の埋葬衣として用いられる前にこの衣装は、空位となった王権の連続性を象徴する装置としての役割をも果たさなければならぬ。死んだ王の息子 (*Muanym munen*) が王を代行する<sup>25)</sup> 数日のあいだ、この *bwaancy* を着て新たな王の決定までの王位の空白をうめる役割を果たすのである（この期間は、王権にとって現実にクリティカルなものとなりう

24) 前出 [CORNET 1982] p311 以下。

25) 王の代行者は、*muanym mua biki nym* (王を王位につける者の意。 *biki* < *abiky* = 王位につける) とよばれ、原則として王が婚資を支払って妻にした女からうまれた息子のうちの最年長者が選ばれる。

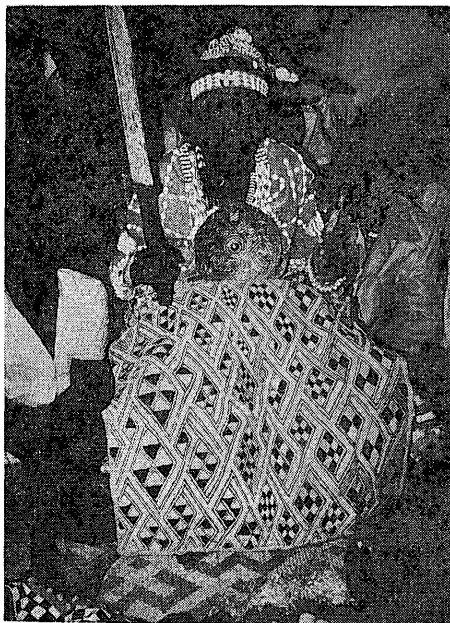


写真1

ブタラのチーフ（ワシの羽の首長のひとり）の衣装。上半身は、Moshanbooyの衣装と同じものである



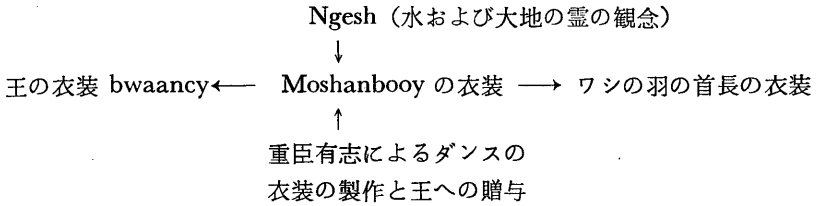
写真2

礼装した先代の王の息子 Ngolshaang Bopey Mabinci 氏。現 Kikam banguom である

る。とりわけ長いあいだ次期の王として待機してきて、心中王の死を喜ぶ第一後継者 Buemy と、死んだ王の子である代行者とのあいだには葛藤があり、場合によっては公式の Buemy が継承権の放棄を強要されることもありうるのである。こうした期間に bwaancy が王位代行者の手中にあることの象徴的意味は大きいと思われる。

## 6. むすびにかえて

王を中心に、さらには王の可視の身体と隠された身体を中心に分節化されたクバの王権が、衣装をどのような装置として用いることで成り立っているのか素描してきた。それは「もの」の側から社会空間を測量し直す試みともいってもよい。あるいは民族技術がどのようなものをうみだすことを可能にし、それがどのような効果によって社会の分節を目に見える装置に現実化するのか考える試みともいえる。いうまでもなくこれは素描にすぎず残る課題は多い。とりわけ霊を表すマスクと結びつき王の死体を包む bwaancy は、クバの衣装文化のなかで頂点をなしかなりこみいった体系を作っているように思われる。いま分かることを図式化すれば次のようなものになる。



すなわち Ngesh を表す Moshanbooy の衣装は、ひとつのヴァリエーションとして王の衣装 bwaancy をうむ一方、クバの王権のもとにある地方首長の埋葬衣としても用いられるもっともグレードの高い衣装として、かれらがクバ王権の権威のもとにあることを目に見えるかたちで表示する衣装ともなっているのである。かれらは首長の権威の目に見えるしるしとして、この衣装を王の村ンシェーングの職人たちから購入しなければならない。王権の中核の部分の構成をささえる衣装の体系が、ここでも王権のいわば周縁部の構成の重要な要素となっていると思われる。また重臣のうちの有志を王が指名し、Moshanbooy の衣装一式を作らせ献上することを求め、見返りに貢献をたたえるタイトルを与えるという。これが老壮年にとっていわば人生後期のイニシエーションのような意味をもっていると思われる（詳しい聞きとりはこれからである）。染織技術の展開と王権形成の歴史との関係もふくめ、明らかにされるべき問題はまだ数多く残っている。

## 付 記

この小論は、1984年度トヨタ財団個人奨励研究費による1984年6月から1985年3月の現地調査および1987年度文部省科学研究費「東部アフリカと中・西部アフリカにおける民族文化の変容過程に関する比較調査」（代表 和田正平 国立民族学博物館教授）による1987年9月から1988年3月までの現地調査で得た知識に基づいてまとめられた。

## 文 献

- アンデルセン, H. C.  
1984 『アンデルセン童話集(1)』大畑末吉訳 岩波文庫。
- CORNET, J. f. s. c.  
1982 *Art royal Kuba*. Edizioni Sipiell Milano.
- FEELEY-HARNIK, G.  
1985 Issues in Divine Kingship. *Annual Review of Anthropol.* 14: 273-313.
- HOCART, A.-M.  
1970 *Kings and Councillors*. Chicago Univ. Pr.  
1978 *Rois et courtisans* (tr. française de 1970) Seuil.
- 井関和代  
1990 「ザイール・クバ族のラフィア染織」本書所収。



渡辺 王の隠された身体

KANTOROWICZ, E.

1957 *King's Two Bodies*. Princeton Univ. Pr.

川田順造

1976 「裸でない王様」『通信』27: 7-10, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

1979 『サバンナの博物誌』新潮社。

1981 『サバンナの手帖』新潮社。

KUPER, H.

1973a *Costume and Identity*. *Comp. Stud. Soc. Hist.* 15: 348-367.

1973b *Costume and Cosmology: The Animal Symbolism of the Ncwala*. *Man (NS)* 8: 613-630.

ポガトイリョフ, P. G.

1981 『衣装のフォークロア』松枝到・中沢新一訳, せりか書房 (原書は1937)。

RANDLES, W. G. L.

1961 *Ancien royaume du Congo*. Mouton.

SERLE, W. and G. J. MOREL,

1979 *Les oiseaux de l'ouest africain*. DELACHAUX & NIESTLÉ

武田佐知子

1984 『古代国家の形成と衣服制』吉川弘文館。

TORDAY, E. and M. A. JOYCE

1911 *Notes Ethnographiques sur les peuples communément appelés Bakuba ainsi que sur les peuplades apparentées—Les Bushongo*. Musée de Congo Belge.

VANSINA, J.

1964 *Le royaume Kuba*. Musée Royal de l'Afrique Centrale.

1978 *The Children of Woot*. Wisconsin Univ. Pr.

渡辺公三

1985 「生を彩る布・死を包む布」『イメージの冒険——アフリカ美術展カタログ』。

1987 「クバにおける *nshaang* (転生)——アイデンティティあるいは自己の中の他者」和田正平編『アフリカ 民族学的研究』同朋舎, pp. 265-301。

1989a 「布の始源——草ビロード (ザイール・クバ王国) の空間とリズム」民族芸術学会編『民族芸術』Vol. 5, pp. 43-56。

1989b 「多産の王と不能の王——クバおよびレレにおける王権の形成と否定」『社会人類学年報』Vol. 15 弘文堂, pp. 31-57。

別表1 クバ王国の重臣 (Bakolm=Binaan nuiminyim) リスト

タイトル (図のNo.)	鳥の羽 (Lashal)	クラン	王との関係	現状 (1989年現在)	役割の内容	
*1	*2	*3				
Cikil (1)	K.	Matoon			本文参照	*5
Ipancil (2)	N.	Minbang't (Ishoody)	—		本文参照	*5
Nymishoong (3)	N.	Minbang't (MatuungまたはBuay)	—		Ipancil とおなじように王に直言する。また王に女性をさしだすよ う命ずる役。	*5
Nyang (13)	N.	Minbang't	—		同上	*5
Muadidi (15)	—	—	王の息子で最年長者		本文参照	
Cikil Muadidi	I.	—	王の息子		Muadidi を補佐する。	
Kikam Bushoong (16)	P.	Minbang't	王の息子		本文参照	
Kin Minbang't	?	Minbang't	王の息子		Kikam banguom を補佐する。	
Mbecmy (23)	Ka.	—	王の息子		本文参照	
Mbiengy (22)	Ka.	—	王の孫		本文参照	
Iyol a Mbiengy	I.	—	—	欠員	Mbiengy を補佐する。	
Iyol (21)	P. (3本)	Minbang't (Iliengy)	—		本文参照 ただし戦士の長といってもむしろ村内の取り締まり。	
Shesh (12)	P. (3本)	Minbang't (Ngosh)	—		本文参照 同上	
Ncey Iyol	P. (2本)	—	王の息子		Shesh を補佐する。	
Nnga Shesh	P. (?)	?	—		Iyol を補佐する。	
Mbiemy	I.	Lanim, Yem, Bueym のどれか	—	欠員	クバ王国内の、水および土地の霊 Ngesh と親密な関係をもった医療者 Ngesh たちを統括する。	
Nymshcky	I.	—	王の息子	欠員	植民地化以前おこなわれた毒による試罪法をとりしきる者 (Shcky) を 統括する。	
Nybiin	I.	—	—		王の衣装を製作する職人の長。有能な者を王が選任する。	
Muedi	I.	—	—		Nybiin の補佐。	
Nymibatudy (5)	I.	—	—		本文参照	
Nymbalk	I.	—	—	欠員	賠償の必要な係争事件をつかさどる。賠償の不履行などを罰する。	
Kishidi	I.	—	王の息子		?*6	
Bulaam Mabuon	I.	—	王の息子		各村の代表者 (ibuon/mabuon) が何か問題をかかえている時、その代表	

Nym a Ncok	I.	—	王の息子	として王に会う。 狩人が象 (Ncok) をしとめた時、この役職を通して王に知らせ、象牙を献上する。
Nym a Niet (18)	I.	—	王の息子	狩人が水牛 (Niet) をしとめた時、この役職を通して王に知らせ、角を献上する。
Makaan	(I. ?)	—	—	交易にたずさわる者の統括、交易にかかわる係争、市での価格のコントロールなど。
Nym lakul	(I. ?)	—	—	市での肉の分配、価格をコントロールする。
Nymishol	(I. ?)	—	—	漁師を統括する。
Nymlaking	(I. ?)	—	—	買でとらえた獣についての係争事件を裁く。
Nybict	I.	—	王の息子	奴隷にかかわる問題をつかさどる。奴隷売買についての係争を裁く。
Nybiem	I.	—	—	窃盗事件にかかわる問題を裁く。
Nymashiim	I.	—	—	欠員 首吊り自殺者がでた時、その遺族から罰金をとりたてる。
Nybiit (10)	I.	—	王の息子	対外的な戦いにおける戦士の長。
Katieng (20)	(I.) 埋葬時*4	Minbang't	王の娘	本文参照
Nbaan (11)	(I.) 埋葬時*4	Minbang't	王の孫娘	本文参照
Nyiom (14)	I.	—	王にならずに死んだ 王位継承者の息子	ンシェーングで王族の住む区域 Ngel Mbiim 内で王族の子女の争いが生じた時調停する。
Nyiang Buemy	I.	—	—	第一後継者 Buemy づきの Nyiang。
Nkam mu Nceci (8)	I.	Minbang't (?)	—	本文参照
Mikok (4)	I.	—	—	Mikok は焼き畑のために切り倒した木のこと。かつて王は出御の時 Mikok の背の上を歩いた。
Ntotol	(I. ?)	—	王の息子	ひとびとのうわさ、情報を聞き集める。
Tancion	(I. ?)	—	王の息子	製鉄用の砂鉄を集める責任者。
Kolmat (6)	I.	—	王の息子	戦さの後の武装解除をつかさどる。首に巻いた弓の弦を外して切り戦いの終わりを示す。
Maluom	I.	—	王の孫	伝統製法の塩 (ngel bukal) を地方から献上する時、この役職者を通した。
Cikil Maluom (19)	I.	—	王の娘の娘の息子	欠員 Maluom の補佐。
Iyol i Buong (7)	I.	—	王の孫	欠員 ?

Luong Piemi (9)	I.	—	—	欠員	?
Kikam Bangelabol (17)	I.	—	Lodi への道ぞいの村の出身者	欠員	? (bangelabol は隣国ンデンゲセヘサンクル川を渡る Lodi の村への道の名)
Cibuongbuong	(I.?)	—	王の息子	(欠員?)	?
Mbeki butuimy	(I.?)	—	—	(欠員?)	?
Ncial	(I.?)	—	—	(欠員?)	?
Shony a Mbuoy	(I.?)	—	—	(欠員?)	?

\*1 このリストは Bual'l の席次にはあげられない Bakolm をふくむ、なるべく網羅的に列挙したものだが、話し手によって少し異同がある。事実上消滅したと思われる役職も少なくない。1950年代の調査時のリストの概略が [VANSINA 1978: 134-135] にある。筆者のえた説明と異なる点もあるが、詳しい検討は別の機会にゆずりたい。このリストの順はある序列を表しているようだが、これと Bual'l (図参照) の席次との異同の理由についてははっきりしない。 \*2 K.=Kosh, N.=Nkidi, I.=Ishkul, P.=Puong, Ka.=Kaang'l \*3 どのクランから選任されるか決められているもの。一は規定なし。 \*4 ふだんは鳥の羽をつけないが、埋葬時に許される。 \*5 これら四つのタイトルはプショングの領土のいくつかの地域の村の支配・代表権と結びついている。その意味で、もっとも古いタイトルであると同時に、直轄の村をもつ、王および第一後継者とある程度並ぶものだという。 \*6 ? の欄についてははっきりした説明はえられなかった。

## 別表 2 衣装の構成の概要

衣装の部位および パーツの名称	使用できるカテゴリー (1~17までの説明は本文参照)																	パーツの特徴		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	9'	10	11	12	13	14	15	16		17	etc.
1) ncuey																				1) 頭部
laket																				冠りもの
-lishaash ingiengy																				ラフィア繊維を編んだふつうの冠りものに近いがラフィアの撚り糸を装飾とする。*1
-nkuuk																				円錐状の台地の真ん中と周囲にワシの羽を植えたもの。*2
-kupash		*	*	*				#	*	*									**#	円錐状の台地の表面をくまなく宝貝とビーズの幾何学文様でおおったもの。
-laket langieeng'dy a pash		*	#	#	#				*	*										ふつうの冠りものの頂点にヨウム朱色の尾羽の束をつけ、宝貝で飾ったもの。
-kuumiluol または kuumbomboosh		*	*	*																円錐状の台地の頂点から同心円状にビーズと宝貝をつけ、さらに紐に通して下げている。

-kalyeem	* * * *	* *			台地をビーズと宝貝でおおい、筒状のものにビーズの三つの帯をつけた飾りに乗せる。
-lapuum	* *	*	*		獣皮に宝貝で装飾したもの。額から顎の下まで尾を垂らしその先に小さな鈴をつける。*3
-shuody	*	*			高さ 10 cm ほどの円筒状の上に 3.40 cm の庇 (つば) をつけ、宝貝で飾ったもの。
-mpaan		*	* *	*	高さ 20 cm ほどの円筒をビーズと宝貝で作った幾何文様でおおったもの。
-ikash					本文参照。三人の役職者だけがつける。*4
-ishaandey					** 円筒状の台地を獣皮でおおい、宝貝で飾ったもの。
-mput mu puong					** 本文参照。
-kuon a nyeny					** 本文参照。
nbup mu bosh					鉢巻き
-nbup mu bosh landel	* * * *	* *	*		ビーズで飾った鉢巻きの下縁に 3, 4 個のビーズの先に宝貝をつけた飾り (landel) をたらす。
2) latol					2) 胸
buoy bu paang					胸飾り
-ngup anshol		* *	* *		輪形の台地を黒白のビーズで作る三角文 (lancoong) で飾ったもの。
-lashaash	*	*		*	豹の臼歯で作った首飾り。
-bushoosh					** 輪形の台地を宝貝などで飾り、山羊の白い毛を放射状に植えたもつともふつうのもの。
3) lakoon, ishok					3) 腰, 尻
iyeemy					巾広の帯
-iyeemy mabnol mataan	* *	* *	*	* *	manbol (組み紐文) を五つ使った帯。
-iyeemy makoong'l matey					** 組み紐文ではなく、ビーズで市松文を描いたもの。
-iyeemy mikomingom					** ビーズで mikomingom とよばれる文様を描いたもの。
-bushyaam mu imbiim					** 文様ではなく宝貝を立てるように並べ縫い止めて作ったもの。
mbuemy					前垂れ
-mbuemy a pash	*	*			宝貝とビーズで獣皮を飾ったもの。
-mbuemy a piem	*	*			先端に巻き貝 piem をつけて垂らしたのもの。

-mbuemy a ngon'l	*	**	**	**	*	*		ngon'l (種は不明) の皮で作ったもの。
-mbuemy a kwey								** 豹皮で作ったもの。宝貝を使わない限りだれもが使えるというのはやや疑問が残る。
-mbuemy a kwey a pash	*			**	*	*	*	豹皮でつくり宝貝とビーズで先端部を飾ったもの。
-mbuemy a ngoong								** 先端に小さな鈴をつけたもの。
iyet								尻当て
-iyet a kwey	*							豹皮製の尻当て。
4) lakol								4) 足
shaang								足輪 shaang (は使われる実の名。これが触れあってシャラシャラと鳴る)
-shaang bilieng (shaang i pash)	**	*	*	*	*	*	*	shaang の実のかわりに宝貝を使ったもの。
-shaang ibelbel	**	*	*	*	*	*	*	足首に止めるラフィア製の台地をビーズと宝貝の市松文で飾ったもの。
-shaang lancoong	**	*	*	*	*	*	*	台地を黒白のビーズで描いた三角文 (lancoong) で飾ったもの。
-shaang imbaam pash				*	*	*	*	台地の縁を黒白のビーズで縁取り真中を宝貝で飾ったもの。
-shaang ilonguon								** 何の装飾もつけない足輪。

註：この表では裳布 mapel には触れていない。その詳細は別に論じるべきだろう。またこれら以外にも種々さまざまなアクセサリーがあるが全てについて調査がすすんでいるわけではないので省略する。[CORNET 1982] にかなりのものについて紹介がある。しかしその説明は、筆者がえたものと違う場合が少くない。

\*1 この冠りものは Mbeemy と Mbiengy だけが使う。\*2 この冠りものは Iyol と Shesh の専用。\*3 この天辺にヨウム羽の羽をつけたものは Cikil 専用。\*4 これは Ipancil, Nymishoong, Nyang のみが用いる。\*\* これはだれでも使うことができるもの。# これは埋葬のときに死体につけることが許されるものである。